

## 有島武郎のことば

—福田準之輔教授との交友に関連して—

小 玉 晃 一

学会を通じての交友関係は、どちらかが専攻を変えない限り、いつまでもつづく。筆者は比較文学専攻の者であるが、昭和三十年代の半ばから有島武郎に強い関心をもち、ぼつぼつ書きつづけてきた

が、その間に知り合った有島研究者の親しい一人が福田さんである。その関係はたぶん三十年以上になると思うが、先生が、無事定年をむかえられ、しかもこの春にはフェリスを去られるという。定年まで健康で無事つとめあげることがいかに大変かを身をもって体験

している私は、先生に心からおめでと、ごくろうさまでした、と申し上げたい。そして〈記念号〉に拙文を加えて下さるとのこと、

〈有島論〉一本を献じたいと考えてきたが、のちに述べる事情でそれもかなわず、タイム・リミットもとづくに過ぎ、これ以上迷惑をかけられないところまでできてしまったので、論説はあきらめて、駄文を弄させて頂く。せめてもの気持ちを込めて、有島に関するもの

としたい。

少し私をとりまく有島研究史的なものから入らせて頂く。福田氏も編集責任者のひとりである〈有島武郎研究叢書〉全十巻（右文書院の第九集、鈴木保昭氏（日本ホイットマン協会会長）と私の編集になる『有島武郎と西洋』の私の巻頭論文で少し触れているので、そこで書いていないことを記す。比較文学を専攻する私が有島武郎に強くひかれるようになったのは、英文科の大学院で修士論文にアメリカの詩人ウォルト・ホイットマンを扱った昭和三十年ころからで、すでに新潮社版の『有島武郎全集』全十巻を所有していた私が、全集を通読していくうちに、自らプロテスタントでもあったことから、有島とキリスト教の問題につきあたっていった。これが私の〈文学とキリスト教〉研究の原点となっている。そのころは有島研究というと、本多秋五氏の『白樺』派の文学』ほかごくわずかで

あった。

書いたものを全国の何人かの研究者に送っていたことから研究の輪はひろがっていったように思うが、なんといっても宇宙論の哲学者の大島豊生と知り合ったことで、有島研究がぐっと身近かになった。ことの起こりは、大島先生の姪ごさん二人が青山学院大学と関東学院女子短期大学とでの私の教え子であったことである。大島さんは有島武郎の教え子であり、一番弟子をもって任じていられた。私が知りあったころ、もう明治大学の教授をやめておられ、悠々自適の生活をなさっていた。先生の周辺には有島の友人や直弟子であるドイツ文学者の吹田順助氏、経済学者の早川三代治氏、日本宇宙旅行協会——昭和三十年代に、こんな大きなことを考えていた人たちがいた！——会長の原田三夫氏、哲学者の谷川徹三氏、作家の芹沢光治良氏などがおられた。

すでに札幌には有島記念会なるものがあったが、私が大島先生に近づいたことから、前述の先生方と、記念会の東京支部（事務局は青山学院大学小玉研究室）をつくろう、ということになり、何度か食事の会をもった。当時まだ三十さいになるかならないかの私は、回顧趣味的な食事会では意味がないと考えていた。そのころ（昭和三十五年ごろ）私はすでに日本比較文学会の本部の仕事を手伝っていたので、会員で有島研究者である小泉一郎（学習院大学）、安川

定男（中央大学）の諸教授と知己であったし、評論家で有島研究でも名高い伊藤整先生や瀬沼茂樹先生とも親しくさせて頂いていた。近代文学研究の坂本浩教授（成城大学）ともどういいうわけか知り合っていたので、大島、小泉、坂本、安川の諸先生と相はかつて、また私のそばにいた有島研究家の川鎮郎君（国際キリスト教大学）にも手伝ってもらい、講演会を開くことになった。

こうして実現したのが、昭和三十九年六月六日に中央大学で開催された第一回公開講演会で、講師は芹沢光治良、伊藤整、瀬沼茂樹の三先生で、聴衆は六百余の大盛況であった。第二回公開講演会は翌四十年六月十二日——いずれも六月初旬に設定したのは、有島が心中したのが六月九日であることにちなんでである——に青山学院大学で開かれた。講師は大島、安川両先生と私。聴衆は三百人余で、第一回目には有島生馬氏ご夫妻とご息女の暁子さん、第二回目は里見淳氏が出席して下さった。二回の講演会に氣をよくした大島先生と私とは、お互いの家を行ったり来たりとの親交をつづけ、この記念会は当然のことに研究会へと発展する含みをもっていたが、中心におられた大島先生が、二回目の講演会から半年もたたない昭和四十年十一月二十七日に亡くなられてしまい、私たち研究者側は勢いをそがれたことと、そのすぐあと日本全国をおそった大学紛争で、私たち大学関係者は手も足も出ず、学会設立どころではなかった。

この前後に「キリスト教と文学」研究会（のちの日本キリスト教文学会）が設立される。日本比較文学会の仲間にすすめられ、セカンドリー時代の妹の恩師であり、比較文学会の会員であることから知り合っていたフェリスの鈴木二三雄教授のご賛同を得て、同じく比較文学の会員であった笹淵友一（当時東京女子大学）、小泉一郎の両先生、それに藤村研究家の伊東一夫教授（東洋大学）がたと相談して設立にふみきったのは昭和四十年五月のことである。事務局は当然口火を切った青山の私の研究室に置かれた。この研究会は各方面から設立が待ち望まれていたようで、またたく間に大研究会となり、前述のように学会を名乗ることになるが、有島記念会と同じように、このときも記念会とキリスト教文学会の二つの団体は、のちに誕生する有島武郎研究会の史的な部分となっている。このときも日本比較文学会の会員が中核となっているし、いかに熱気が強かったかは、設立後、二、三年して、文部省の科学研究費（共同研究）を申請することになり、これは一発で認められ、私たち二十名前後の共同研究者たちは一同に会することになる。青山学院近くのレストランで会議と懇親のときをもったのが、はたして、いつ、どこだったのか思い出せない。私にいつも協力してくれているICUの川君にもきいてみたが、彼も思い出せないとのこと。いずれにしてもこの初会合のときに、福田準之輔氏（当時山梨英和教授）が私

の前に登場するのである。

つとにその名前と研究は知ってはいたが、福田氏にお目にかかるのは、はじめてであった。関西の大学を卒業されて、東の方へ来られて、いわばそういう人たちの中心で重鎮であられ、その研究にはわれわれはすでにお世話になっていたので、加わって頂くことになったのだが、先生は喜んで協力して下さり、私どもと親交を結ぶようになって下さった。紛争がはじまってから共同研究の申請を出せるはずがないから、紛争前に違いなく、とすると、四十二年か四十三年の前半ということになるので、福田先生と私はもう三十年以上のおつきあい、ということになる。本号執筆者のなかでは最も古い友人のひとりではなからうか。

さて、話をふたたび有島に戻す。東京で盛りあがりを見せた有島研究の雰囲気は、前述のように挫折して、私どもをとりまく状況もそれを許さなかった。したがって、研究会設立の声は川君と私との間で、小さな声でささやかれる程度で、大学紛争という厳しい日常生活に私どもは埋没していた。ただこの間も安川定男先生は『黒の会』の雑誌に有島研究の連載をつづけられ、それはのちに『有島武郎研究』（明治書院）に結実する。

それからほぼ二十年近い歲月が流れる。瀬沼茂樹、安川の諸先生の研究に触発され、最もおくれたはずの有島研究もずい分進ん

た。研究会設立の機は熟した、というか、時は満ちた、というべきか、九州、中国の方面から声が大きくなり、関西にまで達した。まさに明治維新のような感じであった。東京の私たちにも打診があり、打診というより、決起をうながす檄というべきだろう。かくして昭和六十一年秋にICUの川君の研究室に有志が集まり、正式に有島武郎研究会を発足させることになる。昭和六十二年六月の第一土曜日——六月にこだわるのは先述のとおり有島が命を断った月だからである——に、ICUで第一回の大会を開いた。新聞も宣伝してくれ、二百名近い参会者を見たが、驚いたのはその夜の懇親会であった。もとより福田氏などと私どもはすでに仲間意識をもっていったが、北は北海道、南は九州・沖縄からかけつけた研究者たちの半数近くは初対面の人たちであったが、お互いに文通仲間であったり、論文を交換している関係であるなどで、初対面の感じがまったくしなかつた。同好者同士とはこういうものか、と感嘆したもののだが、学会や研究会など、趣味の会と同じようなものではなからうか。つまりなにか魅入られた者の集団なのである。私は二十代の終わりから今日まで、日本比較文学会、日本ホイットマン協会、日本キリスト教文学会その他——もちろん有島武郎研究会も含めて——の組織の世話役をしてきたが、比較文学会など、やめられない事情があつて、もう二十三年間理事をつづけている。ずい分無駄な時間と

金をかけたと思うが、趣味や道楽に時間や金がかかるのは当たり前で、私の場合、かけた時間や金以上のたくさんものを貰ってきた。関係してきた会を通して自分の研究が進んだこと、それにも増して、貴重な友情、人間関係をもつことができたこと、等である。福田氏との関係はまさにそのよい例であるというべきか。

研究会ができてから、全国の有島研究者は年二回の大会で、だいたい揃う。壮観である。だから福田氏とも年二回会うことができ、と書きたいところだが、書けない。というのは私は昭和五十三年からフェリス文学部に非常勤として、のちに学部と大学院、現在は大学院だけ、お世話になつており、しかも火曜日の午後出講しているので、会議のある福田さんとは廊下などでちよくちよくお会いして立ち話をする。学生や院生たちも重なつているので、福田ゼミの学生から先生の話はよくきく。フェリスで有島の話をあまじしないのが任侠の世界に生きたい私の仁義かな、と思つたりもするが、異なる有島論をきかされるのも学生にはプラスかな、と思つたりもしてきた昨今である。有島に対する解釈は異なつているかもしれないが、研究に対する態度には同世代間の共通性があるような気がする。研究会などで若手の評論家風の発表に対していきどおりを私にもらされる氏の姿勢に私も共感する。私のように外国文学をやっている者からいえば、国文系の若手がカタカナことばを多用するのに

腹が立ってならない。

権威を嫌い、ロウフアー（自由人、自然人）を生きたホイットマンに憧れた有島の研究会には会長を置かず、代表制にしよう、という私の意見で、しかも二年任期ということで船出した研究会の、福田氏は第五代目の代表（平成七年四月―九年三月）になられた。私は外国文学畑からははじめて、その次の第六代代表となったが、福田氏の次ではやりにくくて困った。それは氏が代表の仕事完璧にこなしたからである。年二回の大会開催、「会報」の発行という恒常的な業務だけでも、本務をもっている者には大変なのに、その上、彼は機関誌『有島武郎研究』（年刊）を企画し、発行しはじめたのである。会員百数十名という会の規模といい、財政上から見ても、私などは無理と批判的だったのだが、彼はやってしまった。やってみれば、結構やれるもので、今は若手研究者の発表のすばらしい場となっている。福田氏の統率力と実行力には眼を見張らせるものがあった。

もうひとつ、日本の有島武郎研究を一步も二歩も進めたものに、前述した〈有島武郎研究叢書〉全十集がある。十集の内容は『有島武郎の作品』上中下、『有島武郎の評論』、『有島武郎と社会』、『有島武郎 愛』、『有島武郎とキリスト教』、『有島武郎と作家たち』、『有島武郎と西洋』、『有島武郎と場所』であり、各集とも十名前後

の会員がいろいろな角度からの論を寄せていて、戦後出おくれたいた有島武郎研究の進展をまさに世に問うた有島武郎研究会の学界に対する大きな貢献となったと思う。福田氏は四人の責任編集者のおひとり、氏の代表在任中のお仕事であり、そういう意味で氏は研究会のみならず、欺学に残されたお名前は大きい。雑誌の発行、叢書の刊行をされてしまつては、六代目代表たる私のすることは、はや私の長年の夢だった『有島文学事典』のほかになかつたが、乗り気だつたはずの出版社がこの不景気で口をつぐむようになり、それに加えて、一昨年一月に私が交通事故を貰い、ムチ打ちで現在も通院中であることなどで、とうとう陽の目を見なかつた。したがって私は会の恒常的な仕事をしただけで、退任のあいさつで「継続は力なり」とだけ力なくいわざるを得なかつた。華々しいお仕事をされた福田氏をうらみたいような気もするが、ただひとこといわせて頂ければ、代表の私を事務局長として助けてくれたのが万葉学者で有島研究家でもある石丸晶子さん（東京経済大学）で、彼女がカトリック信者で、私がプロテスタントであるところから、このふたりのコンビならでは、有島文学理解には不可欠なキリスト教的な、精神的なテーマをシンポジウムに何回かとりあげたことである。この点は福田氏も認めて下さるであらう。

福田さんを語るはずが、自分を語ってしまったようで気がひける

が、戦後の有島研究の一面の回顧になっているかとは思う。福田氏との交流はあくまでも有島研究を通してであり、冒頭にも書いたように、同好の士として友情をお示し下さった先生に感謝したい。ご退職後は完全にご自分の時間、今までなさりたくてできなかったお仕事をそのまま下さり、私どもにいろいろお教えを頂きたい。「好漢、自重され、健康たれ」と念願する次第である。

最初は武郎の弟生馬さんの『思い出の我』と暁子さんの遺稿集『愛の道——有島暁子の生涯——』に触れつつ、有島武郎とその周辺に関する一本を福田氏に献じたかったが、先述の事故の後遺症と、現在、一昨年むかえた日本比較文学会創立五十周年記念の『学会五十年史』編集の責任者の仕事と重なって、かなわなかったことをお詫びとともに付言させて頂き、擱筆したい。

二〇〇〇年二月十三日

(青山学院大学名誉教授)